

## 再魔術化する「眼」

### ―「眼」によるシュールレアリスム詩の実践―

文化創造研究科クリエイティブライティング領域

一七〇〇三CCM布 目 有 里

#### 修士論文要旨

本稿は五章構成の論と詩作品十編から成り立っている。

本稿の目的は、「眼」によるシュールレアリスム詩を実践するためである。「感受性の祝祭の時代」の詩人たちを経て、シュールレアリスム同人誌『鰐』に着目した。

特に同人メンバーの清岡卓行は、「カメラ・アイ」という語を用いて、自動記述について述べている。

本稿では、清岡の言説をオリジナルのシュールレアリスムとの比較検討をせず、清岡の「カメラ・アイ」という語を中心に考察することとした。

まず二章から四章では、シュールレアリスムが日本で受容されるに至った流れを、詩作品の読解と共に考察している。二章では、北園克衛や瀧口修造らがシュールレアリスムを実践した背景を、関東大震災との関連を中心に考察している。三章では、先述した『鰐』と鮎川信

夫らによる『荒地』との比較検討から、『鰐』同人らの志向性を見出している。四章では、天沢退二郎「眼と現在」と谷川俊太郎「沈黙の部屋」を取り上げている。天沢や谷川の詩の意識は、清岡卓行の「カメラ・アイ」の意識に近いことを示した。

五章では、清岡卓行の「カメラ・アイ」について考察している。清岡の言説で問題なのは「カメラ・アイ」で見る現実が従来の現実（リアリズム）とかけ離れている点である。清岡のリアリズムを示すため、同時代の言説である丸山眞男の論考を加えた。

丸山の現実認識は「媒介された現実」であり、清岡の言説との共通項が見出せた。さらに、現在の電子メディアの発達に着目し、鷲田清一の論や映画「マトリックス」を例に挙げ、電子メディアの発達を指摘した。

また北澤裕の論からヴァーチャル・リアリティの視点も加えた。清岡や丸山らの現実認識は戦後特有のものではなく、現代の現実認識にも通じていると考察した。

五章後半では、「眼」で見る行為について考察した。この行為は、科学的な「脱魔術化」と「視覚スペクタクル」の「再魔術化」の過程を構成する。

清岡の言説は「現実」がそのままの「現実」である認識の枠組みから離れ「再魔術化」を施すことによって「媒介された現実」であることを示している。

これらのことから、自身のシュールレアリスム詩の指針を見出し、詩作も行った。